

○佐渡旭・山口茂・工藤陽史
(熊本農研セ)

【目的】

キギョソウ (*Antirrhinum majus* L.) は量的長日植物であり、アメリカで分類されたⅠ～Ⅳ型の4グループはそれぞれの順に日長反応が強くなる。海外では無摘心栽培で日長、光強度などの影響が検討され、Ⅲ型品種を短日に栽培するには長日処理が必要であるとされている(Corr・Laughner, 1998)。本研究室の2006年度試験では、‘バタフライホワイトⅢ’ (ペンステモン咲キ, Ⅲ型) を用いて、定植直後からの暗期中断処理で採花日が大きく前進するが、切り花品質が劣ることがわかった。本試験では、年末出荷に適した暗期中断処理の開始時期を検討した。

【材料及び方法】

試験は農産園芸研究所のガラス温室(厚層多腐植質黒ボク土)で行った。市販の晩生品種‘バタフライホワイトⅢ’(Ⅲ型)を供試し、2007年8月16日に200穴セル成型トレイに播種し、ミスト灌水育苗を行った苗を9月6日に株間15cm×条間15cmの6条植えて定植した。摘心は本葉2枚目の上部で10月6日に行った。暖房設定温度は11月8日から2008年3月31日まで10℃に設定し、日中は15℃換気を行った。

試験区は、自然日長区(対照)と、暗期中断の

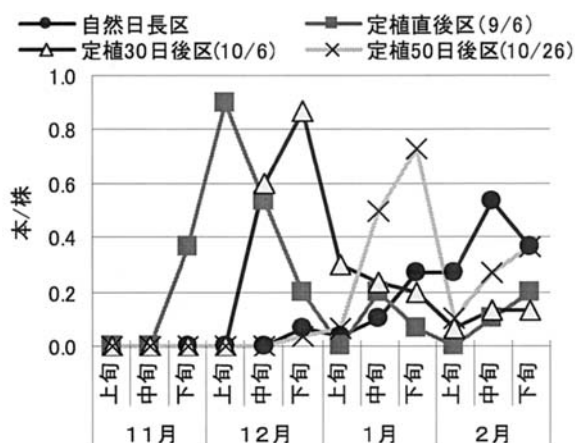


図1 電照開始時期が収量推移に及ぼす影響

開始時期別に、定植直後区、定植30日後区、定植50日後区の4区とした。暗期中断は白熱灯(75W)による深夜4時間(22:00~2:00)で行った。試験規模は1区30株とした。調査方法は小花4輪が開花した時点を開花日とし、2008年2月29日まで開花した全分枝を分枝基部から1節残して採花し、発生部位別に切り花調査を行った。

【結果及び考察】

1番花の採花時期のピークは、自然日長区で2月中旬、定植直後区で12月上旬、定植30日後区で12月下旬、定植50日後区で1月下旬であった(図1)。

11月~12月の2L品の収量は、定植30日後区で最も多くなった(図2)。

採花始め1ヶ月間の切り花品質は、自然日長区が最も優れ、電照区では電照開始時期が遅れるほど概ね優れる傾向にあったが、調整重は電照区間で大きな差は観られなかった。

以上の結果より、9月上旬植えⅢ型ペンステモン咲キギョソウで定植30日後から暗期中断処理することにより、収量ピークを年末に前進させることができ、2L品の収量が多くなることが明らかとなった。

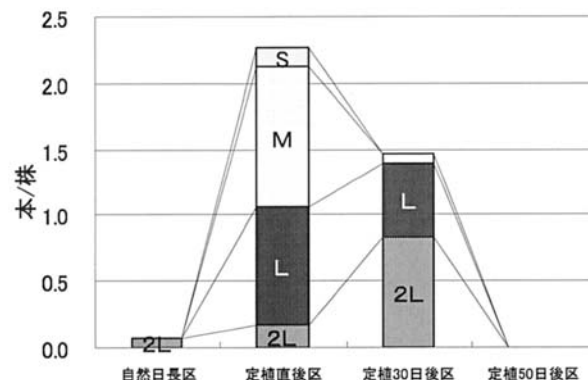


図2 電照開始時期が11~12月の切り花長別収量に及ぼす影響
2L: 85cm以上 L: 85~75cm
M: 75~65cm S: 65~50cm
(熊本県花き農協出荷規格による)

表1 電照開始時期が採花開始日から1ヶ月間の収量及び切り花品質に及ぼす影響

電照開始時期	収量/株 (本)	切花長 (cm)	調整重 ^z (g)	茎径 ^y (mm)	花穂長 (cm)	小花数
自然日長区	0.7	120	35.4	5.2	14.1	16.1
定植直後区	2.1	73	30.6	3.9	13.4	11.9
定植30日後区	1.8	87	28.9	4.4	13.8	13.1
定植50日後区	1.1	118	29.8	4.6	14.0	14.1

z: 80cm調整後、下葉20cmを欠いた後の切花重 y: 80cm調整時の切り口径